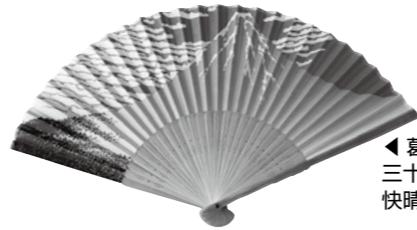


富士山 〔解説〕

本年6月、群馬県の富岡製糸場と絹産業遺産群が世界遺産に登録され、来場者も一気に増えて地元はお祭りムードに。昨年の富士山に続き、日本での世界遺産(文化・自然遺産)はこれで18件になる。本来なら、登録された昨年のうちに企画を打ち出すのが常套なのだろうが、富士山そのものは日本を象徴する名山として世界的に有名である。ひと息ついた時点でじっくり構えてアイデアを練っても遅いということはない。そこで、あらためて富士山に関する知識とその魅力を知っておきたい。ここではその一助として、其の1「富士山概要」、其の2「富士信仰」、其の3「美術と富士」、其の4「文学と富士」の以上4点から解説した。

其の1 富士山概要

【富士山】 静岡県山梨両県にまたがる成層火山。標高3776mで、文字通り日本一高い山である。低地から聳えるので火山体そのものが高く、基底は直径35〜40kmに達し世界屈指の大きさとなっている。富士山(以下富士)が世界に名高く、日本で崇められているのは、もちろんその大きさだけでなく、均整がとれたいわゆる八面玲瓏の山容にある。



【富士山】 北斎の「富士三十六景」をモチーフとした扇

富士は、溶岩流と火山灰と火山砂礫が交互に堆積して成長した成層火山だが、おもに流動性の高度な玄武岩からなるために、個々の溶岩流は薄く細長く、また噴火活動は比較的穏やかに行われた。ことに、火山体を築く大量の噴出物がただ1個の頂上火山口から噴出され、これを中心として各方向にほぼ平等に堆積したことにより、その山容をあらわしたものである。頂上が急で、裾野に下るほどゆるやかな山腹傾斜をもち、火山側線は放物線に似た二次曲線をなす美しい切頭錐体(コニテ形)である富士は、富士形の火山の典型となる。国内の各地に富士の別名をもつ山が多いのは、そうした所以である。

其の2 富士信仰

富士信仰とは、富士山を神と見立て信仰・崇拝する対象とすること。富士山頂にある浅間神社は、富士の神霊として考えられている浅間(せんげん)大神を祀る神社。浅間大神は、通常は木花咲耶姫命(コノハナサクヤヒメ)のことだとされている。火中出産から「火の神」とされることがあるが、富士山本宮浅間大社の社伝では火を鎮める「水の神」とされている。いつ頃から富士の神が木花咲耶姫命になったのかは定かではない。信仰の対象として登拝が行われるようになったのは平安中期からとされている。特に富士講が組織された江戸時代以降に盛んに行われた。富士講は、定期的に行われる「オガミ(拝み)」と呼ばれる行事と富士登山(富士詣)から成っている。オガミでは、勤行教典「オツタエ(お

伝え)」を読み、「オガミダンス(拝み筆筒)」と呼ばれる組み立て式の祭壇を用いて「オタキアゲ(お焚き上げ)」をする。また信仰の拠り所として石や土を盛って富士山の神を祀った富士塚(自然の山を代用することもある)を築いた。現在、江古田(東京・練馬区)、豊島長崎(同豊島区)、下谷坂本(同台東区)、木曾呂(埼玉・川口市)の4基の富士塚が重要有形民俗文化財に指定されている。



【富士の意匠の蓄置き】 小皿等。右側蓄置きは色違い(青、赤)で三峰富士のくつきりとしたデザインが印象的

其の3 美術と富士

富士山絵画は、平安時代に歌枕として詠まれた、諸国の名所絵の成立とともに登場したとされている。鎌倉時代には山頂が三峰に分かれた三峰型富士の描写法が確立。『伊勢物語絵巻』『曾我物語富士巻狩図』など物語文学の成立と共に舞台美術としても富士が描かれた。絵地図などにおいては、他の山々と区別して山頂が白く冠雪した状態で描かれ、特別な存在とされていた。江戸時代には明和4年(1767年)に川村岷雪が絵本『百富士』を出版し、富士図の連作を提示。それに影響を受けたのが葛飾北斎で、晩年、錦絵による富



【文房具各種】 付箋、そえぶみ箋、右端はマグネット菓

デザインなどあらゆる美術のモチーフとして扱われている。今年是世界遺産登録に伴って記念切手も相次いで発売された。

其の4 文学と富士



奈良時代に編纂された日本最古の歌集『万葉集』(20巻・4500首)には「日の本の やまとの国の鎮めともいまず神かも 宝ともなれる山かも」の一首がある。これには、富士への国宝としての賛美と、日本鎮守の霊山としての信仰が詠まれている。万葉集の中で有名なのは山部赤人の次の歌。

山部赤人の不尽山を望みし歌一首

天地の分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高嶺と 天の原 振り放け見れば 波る日の影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくそ 雪は降りける 語り過ぎ 言ひ絶ぎ行かむ 富士の高嶺は 田子の浦ゆ

うらみ出て見れば ま白にそ 富士の高嶺に 雪は降りける 天高くそそり立つ、靈性を備えた崇高な山として富士を讃えたもの。『万葉集』以降、『古今和歌集』(905年)、『新古今和歌集』(1205年)などの勅撰和歌集にも題材として富士は多く詠まれている。日本最古の物語とされる『竹取物語』では、富士山頂で、かぐや姫が残した不死の霊薬を焼いたので、今も煙が絶えないと語っている。すなわち、遠い東路の噴火山としてとらえ、貴族たちは、むしろこの山を絶えず燃え続けるおもひ(火)の山(恋の山)として歌枕に用いている。このほか在原業平が主人公とされる『伊勢物語』、菅原孝標女作の『更科日記』や『平家物語』などにも登場している。江戸時代では俳諧に登場。松尾芭蕉の『野ざらし紀行』に納められた「霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき」は有名。箱根関を越えた日は雨で、富士を見ることができなかつた。見えない富士を詠むことがまた一興となつていく。『雲霧の暫時百景をつくしけり』。この句に富士の名は出てこないが、野ざらしの旅の途上、雲や霧のためにいろいろな姿を見せ、少しの間も同じ状態にとどまっていな変幻自在な富士の印象を詠んだものと考えられている。



【手ぬぐい2種(左)と「松に富士」の意匠の懐紙

明治から大正の文学では、近代山岳文学の先駆者小島烏水の『不二山』、詩人であり評論家でもあった大町桂月が著した紀行文『富士の大観』などが、富士山をテーマにした文学の先駆けとなった。他には、中村星湖の『少年行』、北村透谷の持論『富嶽の詩神を思ふ』など。俳句・短歌の分野では、正岡子規、島木赤彦、飯田蛇笏、若山牧水などが特筆される。中でも牧水は、富士山を生涯愛し多くの歌を残した。いくつか紹介しておく。

れる御坂峠から眺める富士に関しても、あまりにおあつらいむきの富士で、その俗っぽさに一目見て狼狽し、顔を赤らめ、風呂屋のペンキ絵、もしくは芝居の書割とまで言い放つ。デカダンな生活を続けていた太宰らしいこき下ろしかただ。しかし、3ヵ月ほど富士と対峙することによって、「私は、部屋の硝子越しに、富士を見ていた。富士は、のっそり黙って立っていた。偉いなあ、と思った」と富士を受け入れている。『富嶽百景』は、太宰の作品では比較的少ない肯定の文学とされている。受け入れたのは太宰というより、むしろのっそり黙って立っていた、やはり富士の方だったのかも知れないと思わされる。異色の作家としては富士山測候所の勤務経験と、熱いヒューマニズムで富士を書き続けた新田次郎は忘れてはならない。このほか、富士山をテーマにした文学は枚挙に暇がない。

昭和の文学では、何と言っても太宰治の小説『富嶽百景』に出てくる「富士には月見草が良く似合ふ」のフレーズが有名だ。この言葉は、「3776mの富士の山と立派に相対峙し、微塵もゆるがず、何と言うのか、金剛力草とでも言いたいくらい、けなげにすつく立っていた月見草は良かった」に続くもの。だが、それより前に「東京のアパートから見る富士はくるしい。冬にははつきりと、よく見える。小さい、真っ白い三角が、地平線にちょこんと出ていてそれが富士だ。なんのことはないクリスマスの飾り菓子である。しかも左のほうに、肩が傾いて心細く、船尾のほうからだんだん沈没しかけてゆく軍艦の姿に似ている」。また、富士三景のひとつに数えら

士図の連作版画『富嶽三十六景』(天保元年、1831年頃)を出版。大胆な構図や遠近法、加えて舶来顔料を活かした藍摺や点描などの多様な絵画技法を駆使したこれらの連作はあまりにも有名。中でも夏の赤富士を描いた「凱風快晴」や「山下白雨」、荒れ狂う大波と富士を描いた「神奈川沖浪裏」などは、同連作の中でも売れっ子である。北斎より後の1850年には、歌川広重も『不二三十六景』『富士三十六景』を出版。広重は、甲斐国(山梨)をはじめ諸国を旅して実際にスケッチを重ねている。「東海道五十三次」でも富士山を題材に多くの絵を残している。北斎や広重の連作により、さまざまな地点から眺望する富士や、甲斐国側からの裏富士も画題として開拓していった。近代には殖産興業などを通じて富士が日本を象徴する意匠として位置づけられ、美術をはじめ商業デザインなどにも幅広く用いられた。絵画においては伝統を引き継ぎつつも近代的視点で描かれた富士山絵画が制作された。戦時下になると富士は国体のシンボルとしてさまざまなに描かれたが、戦後には横山大観や、片岡球子などが「日本のシンボル」として自由に大胆に己の富士を好んで描いた。富士は絵画をはじめ、工芸、写真、



【富士のこけも】